

2022年3月

『2021年度 私の一冊』

竹原読書会

芳名	著書名	著者	出版社	発行年
講師 吉川五百枝 先生	『灰色の地平線のかなたに』	ルーター・セペティス 作 野沢佳織訳	岩波書店	2012
	<p>2022年2月、ロシア軍は、ウクライナを支配したいためなのか武力で侵攻を開始した。ウクライナの国民は、「国を愛するから戦う」と言って抵抗の戦いをしている。「愛する国」って何だろう？「国」は顔を持たない。そこに在るのは人間としての営みだ。</p> <p>この本は、1991年の独立まで、ソ連の支配下にあったバルト3国の苦痛と希望を小説として描いている。今、改めてウクライナに思いをはせながら紹介したい。</p>			
【 C 】	『線は、僕を描く』	砥上裕將	講談社	2019
	<p>水墨画なんて全く知らなかった大学生の青山くんが、ある出会いから成り行きで水墨画を描きはじめるのですが、水墨画ってこんなにおもしろい、美しい、刹那的な芸術だったんだ！と私は目からウロコ、でした。</p> <p>「自らの命や、森羅万象の命そのものに触れようとする想いが絵に換わつもの、それが水墨画だ」</p> <p>「生きている瞬間を描くことこそが、水墨画の本質なのだ」</p> <p>…紹介しといてなんですが、この本はあまり感想や紹介文、書きたくないなあなんて思います。どう書いても、薄っぺらい感じがしてしまいます。読んでほしい！そんな一冊です。</p>			
【 YA 】	『彷徨の季節の中で』	辻井喬	新潮社	1969
	<p>著者辻井喬(本名堤清二:西武グループ)の自伝的小説。</p> <p>大企業を背負っての人生は一体どんなものだったのか興味が湧いた。</p> <p>生まれ乍らにして、そういう環境にあった自分の出自の怒りや嫌悪。そして政財界の鬼と言われた父堤康次郎(小説内は津村孫次郎)への反抗と軋轢。複数の異なる母の数人の子供との諍い。外からは順風満帆に見える葛藤。</p> <p>私が驚いて惹かれたのが、共産党の国際派に属していたこと。(除名されたが)</p> <p>選ばれない出自、環境の波の中で生きることの重さ、辛さを思う。又堤清二</p>			

	の心身の強靭さに圧倒される。			
【 M子 】	①『1日1語、読めば心が熱くなる365人の仕事の教科書』	藤尾秀昭(監修)	致知出版社	2020
	※続きは後述をご覧ください。			
【 TK 】	『マカン・マラン 二十三時の夜食カフェ』	古内一絵	中央公論新社	2015
	※後述をご覧ください。			
【 JM 】	『黛家の兄弟』	砂原浩太郎	講談社	2022
	筆頭家老の黛家の三男、新三郎は、大目付の黒沢家に養子に入る。武家の、家としての重みの中で生きざるを得ない兄弟たちの生き様を描いている。読後感がいい。			
	『マカン・マラン』	古内一絵	中央公論新社	2015
	シリーズ全4冊。ドラッグクイーンのシャールさんが夜だけ開いているマカン・マランというカフェ。傷ついた人や悩んでいる人たちが訪れ、その料理と人柄に癒されていく。読んでいて自分も癒される。シャールさんに会いたい、マカン・マランに行きたいと思うこと必至。			
【 R子 】	絵本『あの夏の日』	葉 祥明	自由国民社	2000
	長崎に原爆が投下された「あの夏の日」を、長崎市の協力のもと、葉 祥明さんが平和への祈りを込めて、壮烈なタッチで描いています。 平和な生活を一変させた、原子爆弾の恐ろしさが伝わるとともに、すべてを受け入れたナガサキのこころが感じられる絵本です。 核兵器も地雷もない ほんとうの平和がくることを願っています。長崎からの深い祈りを 世界の人々に伝えてください。(出版社の内容紹介から)			
【 KT 】	『夏の庭』	湯本香樹実	新潮社	1994
	死ぬ人を見たい3人の小学6年生が瀕死の老人との交流によって成長していく物語。			

	<p>死ぬ人が見たい3人の小学生。無気力なお爺さんと小学生の交流からお爺さんはだんだん元気になり小学生はいろいろなことを体験し成長していく。そしてお爺さんの死に出会いさらに成長する。小学校を卒業し、子供時代を卒業し、それぞれの道へ進んでいく。</p> <p>彼らは終生コスモスの庭を忘れないと思う。</p>			
【 E子 】	『あなたは、誰かの大切な人』	原田マハ	講談社	2017
	<p>大人の独身女性が主人公の短編集。歳を重ね寂しさと不安を感じる女性が、かけがえのない人に気が付いたときの温かい気持ちが六編を通して描かれている。7。</p> <p>原田マハの本は、作者自身の選定による絵が表紙を飾っています。それもこの作家の本を読む楽しみの一つです。今回この本を今年の一冊として紹介する最大の理由は、私にとって「向き合う」ことをしてくださった人々の存在に改めて感謝の思いを遺しておきたかったからです。</p>			
【 T 】	『地のはてから 上下』	乃南アサ	講談社	2013
	<p>大正から昭和初期、父親の失策で家族4人夜逃げをし、北海道開拓団として知床半島に入植、惨苦の中で幼い「とわ」が成長していく話。</p> <p>*後述もご覧ください。</p>			
【 YT 】	『ポプラの秋』	湯本香樹実	新潮社	1997
	<p>父親を失くしてしまった8歳の少女千秋は母と一緒にポプラ荘というアパートへ越してくる。新しい場所で生活への不安と期待、大好きだった父がいなくなった深い悲しみが入り交じる中、千秋はポプラ荘の大家と出会う。亡くなった者たちのいる天国に手紙を届けられると話す彼女を不思議に思いながらも次第に心を通わせていく千秋。やがてその言葉を信じ、父への思いをつづった手紙を書いて大家に託すことになる。</p> <p>後に大人になった彼女が蘇った思いをつづった物語である。</p>			
【 N2 】	『魂の殺人 親は子どもに何をしたか』	アリス・ミラー 山下公子訳	新曜社	1983
	<p>教育や躰の名による暴力は子どもたちの魂を粉々に打ち砕き、社会はいずれ手痛い復讐を受けずにはすまない。ヒトラーや少女娼婦クリスチアーネの幼年時代を詳細に分析して、教育の暴力性と非人間性を容赦なくえぐり出した衝撃の本。（出版社の内容紹介から）</p>			

【 Y 】	『かがみの孤城』	辻村深月	ポプラ社	2017
<p>いじめなどの様々な理由で心を閉ざし、不登校になった中学生 7 人が、鏡の城に閉じ込められるファンタジーだが、現代の社会問題でもあり、ミステリー的要素に、グイグイ引き込まれて読んだ。</p> <p>主人公は、理解してくれるたった一人の人と、同じような境遇の仲間を通して、次第に、自分の気持ちが言えるようになり、強くなっていく。</p> <p>学校はどうしても行かなければならないとは思わないし、どうしようもできない場所からは、逃げる勇気も必要である。</p> <p>生きづらさを感じている人のあまりにも多い現代、「もう戦わなくていいんだよ」と、理解してくれる喜多嶋先生のような人が一人でもいれば、また、同じような思いの仲間を見つけることができれば変われるのか、と考えさせられた。</p>				
【 K子 】	『蓮如 わが深き淵より』	五木寛之	中央公論社	1996
<p>誰れにでも理解出来る文章(ふみ)の作制に苦慮する蓮如の生きざま。</p>				
【 F 】	『アウシュヴィッツの図書係』	アントニオ・G・イトウルベ 小原京子訳	集英社	2016
<p>※後述をご覧ください。</p>				
【 SM 】	『同志少女よ、敵を撃て』	逢坂冬馬	早川書房	2021
<p>独ソ戦が激化する1942年、モスクワ近郊の農村に暮らす少女の日常は、突然奪われた。急襲したドイツ軍によって、母親ほか村人たちが惨殺されたのだ。自らも射殺される寸前、赤軍の女性兵士に救われる。「戦いたいのか、死にたいか」と問われた彼女は、一流の狙撃兵になることを決意する。</p> <p>おびただしい死の果てに、彼女は“真の敵”とはと考える。</p> <p>戦後の少女と女性兵士の生き方に一條の光を感じる。</p> <p>だが、今目の前で、ロシア軍がウクライナを侵攻している。もし侵攻下に身を置かれたとき、私は人としての尊厳を保てるだろうか。</p>				
【 MM 】	『誕生日を知らない女の子 虐待 —その後の子供たち』	黒川祥子	集英社	2015

虐待による心の傷と闘う子どもたち。そして、彼らに寄り添い、再生へと導く医師や里親たち。家族とは、生きるとは？ 人間の可能性を見つめる。(解説/是枝裕和) (出版社の内容紹介から)

想いがあふれて

◆◆◆【 M子 】 続き

②『潜匠(せんしょう)』 矢田海里 柏書房 2021

遺体引き上げダイバーの見た光景。3.11 東日本大震災直後に現地入りし、現地に居を構えながら被災した人々の声を拾う活動が続ける。

③『赤ちゃんをわが子として育てる方を求む』 石井光太 2020

令和元年6月民法817条の改正によって「特別養子縁組」の成立要件が緩和された。特別養子縁組とは、実親に育ててもらえない子供たちが別の夫婦に引き取られ、法的に実子同然に育ててもらえることを認める法制度だ。昭和63年に施行されて以来、親に棄てられた子供や虐待を受けた子供などを大勢救ってきた。この法律ができた背景に菊田昇という一人の医師の存在があったことはあまり知られていない。

菊田は産婦人科医として、こうして子供たちを救うためにたった一人で国と闘いつづけ、この法律を成立させた。昭和の時代を丸々に生きた65年の人生は、人間の業と抗いつづけた。昇は平成3年4月国連の非政府機関である国際生命尊重会議が設けた「世界生命賞」を受賞。第1回目の受賞者マザーテレサにつづく第2回目の受賞者として選ばれた。受賞理由は胎児を中絶から守り、その人権を訴えたことだった。

④『小説8050』 林真理子 新潮社 2021

いじめにあい、8年間も引きこもりをしている息子の話。

裁判をして、自分の心の問題を解決する。大変な事柄を調べ、家族友人弁護士が協力して決着した。民事裁判なので慰謝料という型でしかきまらない。でも心はすっきりした。

⑤『未来の自分に出会える古書店』 齋藤孝 文藝春秋 2020

言葉にはチカラがあります。そのチカラは個人をこえ、時代を超えて伝わっていきます。

この本にも、勇気づける言葉のチカラがあることを願っています。言葉のチカラを信じて、力強く生きていきましょう。

⑥『天、共に在り アフガニスタン30年の闘い』 中村哲 NHK出版 2013

様々な人や出来事との出会い、そしてそれに自分がどのように応えるかで行く末が定められてゆきます。私たち個人のどんな小さな出来事も時と場所を超えた神聖なものを感じざるを得ません。この広大な縁の世界で、誰であっても無意味な生命や人生は、決してありません。私たちに分からないだけです。この事実が知って欲しいことの一つです。

⑦『後列のひと 無名人の戦後史』 清武英利 文藝春秋 2021

最前列でなく、後ろの列の目立たぬところで、人や組織を支える人がいる。役所の講堂や

会社の大会議室に集められたとき、たいてい後列にモノを言う人間を、後ろの方から凝視している。群衆もある。彼らは大きな何かを成し遂げたわけではなく、出世を遂げたというほどでもない。多くの見返りを求めない人は誰もこの世界に生存の爪痕を残したいと思うときがある。しかし、生き急ぐ必要はない。良く生きた人生の底には、その人だけの非凡な歴史が残るものだという事を18篇の人生は物語っている。

◆◆◆【 TK 】 『マカン・マラン 二十三時の夜食カフェ』を読んで

ストレスや不規則な生活になってしまっている会社勤めの女性はずいぶん、野菜ジュースとかコンビニでのスナック、弁当等を夜遅い為食べている。そこでひよんなことから 23 時～開店の夜食カフェに道に迷って入ってしまう。そこで食べた食事で生活が自分のためになっていないことに気づくのだ。

しかしこれだけでは面白くない。この本で読者迄も自分の生活をふりかえさせられるのである。そして生き方も考えさせられる。

このマラン・カランのお店はドラッグチェーンの御姉様達のお店で本当は夜食のつもりがお店になっていたのである。そしてドラッグチェーンであることに誇りをもった堂々とした振る舞いをしている。女の人は御姉様達に顔色と体調を気遣われ栄養たっぷりの温かい北欧料理を食べることになる。

ところがただ美味しかったでは物語は面白くない。この小説の料理はマクロビオティックに基づくお料理だった。「あなたは陰性の貧血持ちだわ。多分、一日中コーヒーばかり飲んでぎりぎり迄食事をとらずに仕事をしている、そうじゃない？」と言ってそれにふさわしいお料理が解説つきで出てくるのだ。

温かく誇り高い自尊心があり、体に良い生活をして他の人にも気遣っているこんな小説が実に楽しい。御姉様はテレビにでてくる美輪明宏さんとかミッツマングローブさんを思い出させる。都会の狭い路地に見つけた素敵なカフェだった。

◆◆◆【 T 】 『地のはてから』を読んで

大正から昭和初期、父親の失策で家族 4 人夜逃げをし、北海道開拓団として知床半島に入植、惨苦の中で幼い「とわ」が成長していくお話。

上下二巻で少々長いし、方言もあり読みにくいところもあるが、読みだすとぐんぐん引き込まれた。NHK ドラマ「おしん」と時代背景、貧困の中での成長と似通ったところもあり、この時代の貧富の差を考えさせられる。イナゴの害・厳しい寒さ・どん底の貧しさに・・・など北海道開拓団としての大変さが読み取れた。彼らを襲う苦難の連続に、次はいいことが起こってほしい、次こそは幸せになってほしいと願いながら読んだ。

特に印象に残ったのは、母ふちの「どうだことがあったって、お国のいうことなんか信じてあなんね、んめあ話聞かさっても話半分、いんや十に一つ百に一つあつかねあがだと思え・・・。」という言葉や兄直一「とにかく生きろ、生き抜くんだ。」の言葉だ。

国に翻弄され厳しい生活をせざるを得なかったふちやとわ・直一たち。思うよういかない人生ではあるが、強く生き抜く彼らの姿に勇気をもらおう。

◆◆◆【 F 】 『アウシュヴィッツの図書係』

去年のわたしの一冊、夏目漱石の「草枕」から自分は夢を見ることが趣味になりました。体験と妄想がごちゃ混ぜになってしまう夢の中の方が自分の中にしかない自分をはっきりと感じることができます。延期延期になった課題本『生きて帰ってきた男』は、辞書のように使える本だと思いました。社会学者の著者が昭和元年生まれの父から聞き取りを行いまとめた一冊です。わたしの一冊は『アウシュヴィッツの図書係』、事実をもとにした小説です。

この『アウシュヴィッツの図書係』は自分が参加する以前の読書会で課題本だったもので、どなたかのおすすめで読み始めたのでした。読み終えてからしばらくの間、主人公の勇敢な行動を無意識的に思い出しては活力をもらうことが何度もありました。

読書会に参加した当初、自分は辞書や図鑑、地図のような知識をまとめた本こそ所有した読むべき一冊であると信じていたのですが、この2年ほどさまざまな本に触れる中で考えが変わり、色んなきっかけになりえるから色んな本を気楽に読もうという気持ちが生まれてきました。

子供の頃本に夢中になれたのは、本の中の世界が自分の味方だったから…なのではないか？とふと思ひ浮かんだことがありました。冒頭の夢の話に戻るのですが、夢の中の自分の行いを恥じたり嫌な気持ちになったりすることはあっても、みている夢そのものは常に自分の味方で自分を守ってくれるものだと思います。

『アウシュヴィッツの図書係』で描かれた収容所の中での教育が子供達に与える力、というものを時が経ってから理解に一步近づけた気がしました。

たぶん人は本を読むべきなのだと思います。それは役に立つとか面白いといった単純なものから考えれば幾らでも難しい理由も見つけられるでしょうが、そういうことは関係なく。とにかく読めばいいんだと思います。理由は読む人それぞれが見つければいいのです。